

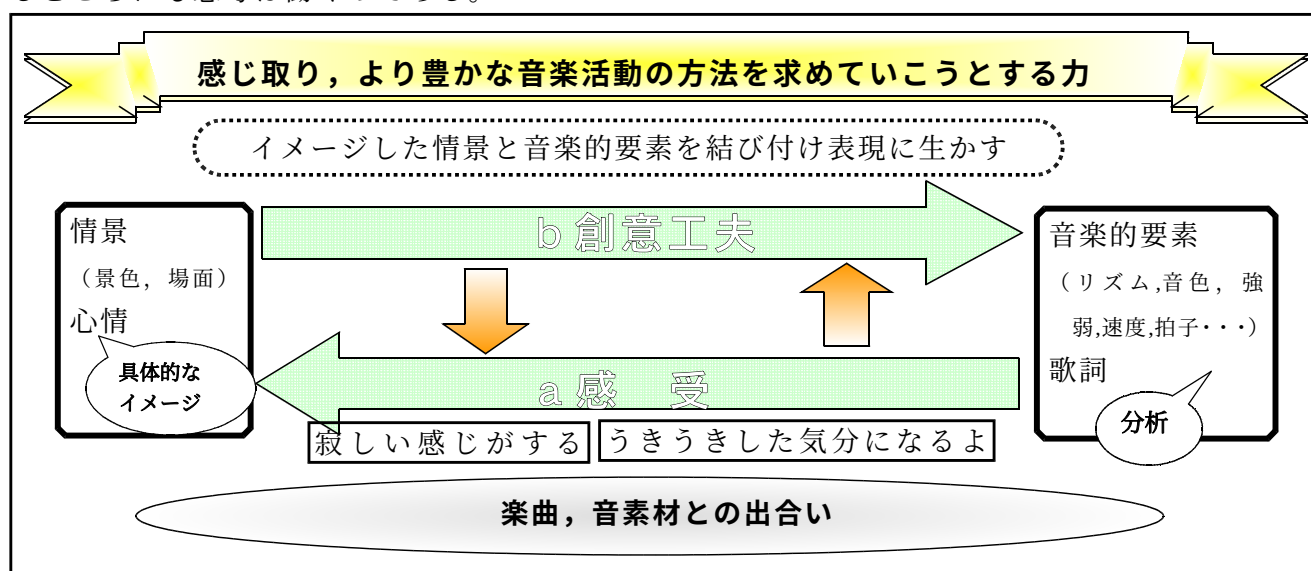
音 楽 科

1 育成したい「思考力」

- a 楽曲や音のもたらす気分や内容から、表す情景を想像したり、特徴付けている要素を感じ取ったりする力。
- b より豊かな音楽活動の方法を求めて、感じ取ったことを基にして自ら創意工夫していかうとする力。

音楽科が捉える「思考力」とは、楽曲や音を通して感じ取ったことを基にして、より豊かな音楽活動へと高めていかうとする力である。このことは、感受することを出発点として、表現するための工夫や、鑑賞の工夫へと展開していく力とも言える。

この「思考力」の観点は、指導要領では、「音楽的な感受や表現の工夫」ということばで表されている。表現領域のみならず鑑賞領域においても、音楽を感じ取る活動として「音楽的な感受や表現の工夫」が大切となる。感受したことを基に楽曲の構成要素を感じ取ったり、特定の楽器の音色の響きを感じ取ったりするなど、聴く観点を明確にしながら鑑賞の仕方を工夫するところにも思考は働くのである。



a 「感受」する力とは

楽曲や音から音楽的な要素や歌詞の構成を基に、その背景にある情景や心情といった具体的な像を描く力である。

b 「創意工夫」する力とは

感受したことを基に、より豊かな音楽活動を求めてイメージと音楽的要素を結び付けて表現の工夫へと創意工夫する力のことである。

aとbの力はそれぞれ独立したものではあるが、音楽活動を進めていく中で、常にどちらも必要となる。つまり、楽曲や音素材を通して子どもたちは様々な情景を感受し、自分なりの表現へと高めていく。その時、情景と音楽的要素を結び付けながら、より豊かな音楽活動の方法を見出していく。これが創意工夫の力である。

このaとbの関連について、以下に具体的に例を挙げて説明したい。

例えば4年生の教材「とんび」を歌唱表現する場合、3フレーズ目のとんびの鳴き声「ピンヨロー」の歌い方について歌詞と旋律、速度などの音楽的要素から子どもたちは曲想や場面を捉える。歌詞の中で鳴き声が4回続いている部分を取り上げ、とんびが飛んでいる情景を思い浮かべる。その時、「音程が高い→低い→高い→低いと変化しているので、二羽のとんびが話している感じがする。」という旋律の動きからイメージをしたり、「1回目が強く2回目が弱く感じたのでとんびがだんだん山の向こう側へ飛んで行くようだ。」というように、強弱からイメージを広げていったりする。これがaの「感受」の思考である。

そして、感受したことを基に、よりよい表現の工夫を考えていく。「とんびが輪を描いて話しているように、強い弱いを繰り返して歌おう。」とか「だんだん山の向こうへ飛んでいくように、だんだん弱く歌おう。」というように場面を想像し、それと音楽的要素を結び付けながら4回の鳴き声をどのように歌うか工夫していく。また、自分がとんびになったつもりで歌ったり、下からとんびを見上げているイメージで歌ったりするなど、場面や気持ちによっても、イメージした情景を表現に生かそうとする。これが、bの「創意工夫」する思考である。このように、aとbの「思考力」を関連し往復しながら、1つの音楽活動が進められていくのである。

2 「思考力」を育成する単元編成

(1) 「歌詞の内容」と「表現形態」の系統性を加味した教材の開発と配列

① 感受を高める歌詞系統の配列

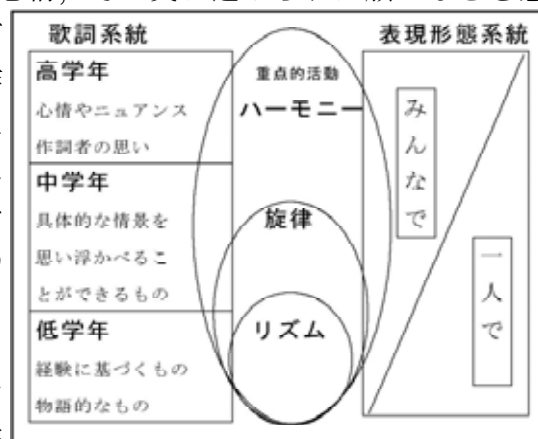
低学年では、自分の経験に基づいて分かりやすいものや、空想が自由に広がるものなどを歌詞に含んだ楽曲を配列する。例えば、「新さぬきのわらべうた」（国民文化祭香川より）という歌は、「うちんくのじいちゃん、よういうん」「どうにもじょんならん」などの身近で使われている方言が歌詞となっており、子どもたちは意味もよく分かり、実際の話し言葉のように楽しんで歌うことができる。さらに、教科書教材である「もりのくまさん」（馬場祥弘訳詞）は、森の中で熊と出会う女の子の物語を楽しく役になりきって交互唱で歌うことができるものである。

一方、中学年では、事実に基づいて具体的な情景を思い浮かべることでできる歌詞が多く使われているものを配列する。例えば、「みのむしのワルツ」（新沢としひこ作詞）は、「枯葉の毛布に包まって、みのむしたちは眠る…」という歌詞から始まり、北風に吹かれながら枯葉に身を包み、揺れているみのむしの様子を表したものであり、子どもたちが具体的なイメージを描きながら、気持ちを込めて歌いやすい。

また、高学年では作詞者の思いや、歌詞から伝わる心情、その奥に込められた願いなどを感じ取って歌唱表現に生かす活動を行う。高学年の子どもたちが大好きな「スマイルアゲイン」（中山真理作詞）の「明日になって 空が晴れたら 自分を好きになってまた歩き始めようよ」という歌詞では、実際に晴れた空を思い浮かべるだけでなく、その奥に潜んでいる前向きな気持ちを歌詞から読み取ることで、曲の盛り上がりへと表現を工夫していくことができる。

② 創意工夫を高める表現形態の配列

低学年の子どもたちは、何かうれしいことがあって気分的に楽しくなると、自ら体を動かして踊ったり好



きなふしを口ずさんだりして、嬉しさや楽しさを表現する。このような自己を表現する意欲や行動は、これから先の主体的な学習をする素地となる。子どもたちは、リズムに対して豊かな感受性をもっており、リズムにのって自由に反応したり、リズムを体全体で表現したりする。そこで、一人でリズム表現に充分浸る活動を重視し、音楽の楽しさをのびのびと経験できるようにすることが音楽的感覚の芽生えとなる。

また、中学年の子どもたちは心身の発達に伴って知識に対する意欲も増してくる。また、自己中心的な面から少しずつ社会性も発達し、学習面においても、少人数でグループを構成して活動することができるようになる。そこで、小アンサンブル活動を取り入れ簡単な重奏や合奏、合唱等に対しても、より豊かな表現に向けて意識が働くようにする。例えば、3年生では「小さな世界」をただ旋律のみを歌うだけにはとどまらず、前半部と後半部と一緒に合わせて歌う活動（パートナーソング）を通して、ふしを重ねることのおもしろさを味わうことができる。

高学年になると、低学年や中学年の頃とは違って、次第に社会性が発達すると共に、ものの見方が客観的になってくる。学習活動においては、音楽の美しさを豊かに感受したり表現したりする意欲が高まり、興味のある音楽や未知の音楽に対しても積極的にかかわろうとする気持ちが高まってくる。そこで、曲想に応じた楽器の選択やよりよい音色の追究、斉唱から合唱へ、または小アンサンブルから合奏へというように多様な表現を楽しむ活動を通して子どもたちが主体的に音楽にかかわることができるようになるのである。

（２）音楽活動に浸り、音楽的要素との結び付きが実感できる単元展開

単元展開においては、まず感受が深まっていくための価値ある題材や楽曲に出合わせることが重要になる。価値ある楽曲とは、特徴付けている音楽的要素が明確であり、子どもたちが取り組みやすく、また活動を進めるにしたがって、深く味わったり成就感を増したりできるような曲のことである。このような曲との出会いが前提となり、次のような教材を展開することで、子どもたちが知らず知らずのうちに音楽活動に夢中になっていくのである。

① 体感を重視した音楽活動

子どもが題材や楽曲に出合ってまず目や耳に触れ、楽しく表現活動をした後、その楽曲の音楽的要素や曲想について知り、魅力ある楽曲について深く理解していく展開である。この活動は低学年に多く、歌ったり曲に合わせて身体表現をしたりする活動の中に楽しさと表現の広がりを見出すことができる。例えば、1年生の教材で「走れきしゃぽっぽ」と「ごりら」という2つの曲がある。これらはどちらもトンタンのリズム打ちをしながら楽しく歌う教材であるが、ここで2拍子と3拍子というように拍子に違いがあることに気付かせたい。そこで十分に楽しんだ後、歌にのせて強拍と弱拍のたたき方を考えながら拍打ちをする活動を取り入れることで、拍子という音楽的要素の違いに気付き、表現の工夫の仕方を広げることができるのである。

このように、活動に浸る場面からその楽曲のリズムや速度などの音楽的要素に気付き、さらにより表現へと展開していく。

② 複数の楽曲を比較する

はじめに諸要素について知り、その後それらの要素が含まれている多様な楽曲を調べたり聴き比べたりして、様々な楽曲の魅力を味わっていく展開である。これは比較的高学年に多い活動である。

例えば、「さくらさくら」（陰音階）の楽曲を通して日本のふしは5音音階であることを学習した子どもたちは、「他の日本のふしも5音からできているのだろうか？」という疑問をもつだろう。そこで、「ソーラン節」をその後に配列することによって、「さくらさくら」と違った5音音階（陽音階）からなることに気付くことができる。そして、他の民謡やわらべうたに



も興味をもち、聴き比べたり楽譜を基に構成音を書き込んだりすることもできるようになる。そうすることで、「ひらいたひらいた」のわらべうたと「ソーラン節」の両方に同じ陽音階が使われていることを確認することができる。また、民謡とわらべうたを聴き比べた時、「わらべうたの方がゆっくりしている」「わらべうたの方が明るい」という感じから、リズムカルな民謡に比べて、わらべうたののんびりとした素朴さを感じ取ることもできる。更に、「谷茶前節」という沖縄の音階をもつ楽曲を配列することでそれも5音からなることに気付き、驚きと共に、「自分たちもつくってみたい」という子どもたちの意欲を喚起することができる。そして実際にそれらの音階を使ったふしづくりの活動をすることで、日本のふしが5音音階から構成されているというおもしろさや魅力を感じ取ることができるのである。

このように、子どもたちが題材や楽曲を通して得た驚きや関心を出発点として、より豊かな音楽表現にするために歌詞や音楽的要素に着目しながら感受を深めるとともに、創造的な音楽活動へと展開していく。

（３）鑑賞で培った思考様式を表現の工夫へと活用する

2年生の教材「国際急行列車」という鑑賞曲を例に考える。ここでは、汽車が駅を出発し、どんどん速さを変化させながら走っている様子や、周りの情景とその時にどんな音がしているかなどについて、汽車になりきって想像させる場を設定する。子どもたちは、「森の中の木々がさわさわと揺れている音が聴こえる。」とか「ゆっくり走るのは海の砂に邪魔されて進めないから。」「だんだん速くなったので、汽車がトンネルを抜けたところだろう。」というように、音色や速度、強弱といった様々な音楽的要素からイメージを広げていく。この感受の際に培った思考様式を次の教材「汽車は走る」という器楽表現の工夫の際に活用させるのである。この「汽車は走る」は、主旋律に汽車の走る音をオノマトペで表した副旋律が重なる楽曲だが、歌詞の中には具体的にどんな情景の中を走っているのかは書かれていない。つまり、自分達が汽車になりきって鑑賞曲で感受し、イメージを広げた様々な情景と結び付けることができるのである。また、周りの情景の音づくりをさせることで、汽車の走る速さや距離による強弱の付け方などに着目しながら思考様式を活用させること、鑑賞の際に生み出された強弱や速度、音色などたくさんの音楽的要素を使って多様な表現の仕方を工夫することもできるのである。



（４）なかまと創作した表現を聴き合うことにより、一人一人の思考を保障する

ここでは、「お祭りの太鼓のリズムをつくろう」という題材で、長^{ちょうどう}胴太鼓や締め太鼓、たる太鼓を使って4人でのリズムアンサンブルの仕方を学習した様子を例に述べる。子どもたちは、「長胴太鼓には『ドンカカドンドン』のような、ゆったりとした打ち方が合うだろう。」というようにそれぞれの太鼓の特徴や音色を感じ取り、3種類の太鼓に合ったリズム表現の仕方を考えながら個人でリズム創作を行った。その後、個人からグループでリズムを重ねるアンサンブルへと表現形態が広がる。すると、曲の入るタイミングや強弱の工夫、拍や速さ等、表現を取り巻くその他の要素に対して、友だちとともに工夫していこうとする力が必要となる。そこに創意工夫する思考が働くのである。また、リズムアンサンブルを通して、様々な音色が重なった表現をグループ内で聴き合ったり、他グループの表現を聴いたりする場を設定する。そうすることで、曲の始め方は「やあっ!」という掛け声から入ったり、長胴太鼓の杵打ちを合図にしたりする等、友達の表現のよさやグループ表現の工夫の仕方の違いを交流・吟味することができる。さらに、自分たちのグループに合った工夫の仕方を新たに取り入れながら、よりよい表現へと工夫していくこともできるのである。